

新テスト——先生はどう対応しますか？

「多量で豊かなインプット」と「適切なアウトプット」

溝畑保之



TOEFL も、昔は、文法問題もある知識中心のテストでした。しかし、「高得点だが、話せない」ことが問題となり、英語使用場面を綿密に調査し、「何ができるか」を4技能で測るようになりました。TOEFL のような最新のテスト理論を用いた外部試験は「何ができるか」を視座にした「絶対評価」のテストです。形式慣れの一時的得点上昇はありますが、半年程度の確かな学習を経ないと、実力を反映する得点上昇はありません。また、特定の外部試験の形式に絞った対策は、学習動機維持の点からも、効果がありません。

大学入学共通テストも、TOEFL と同じく、CEFR も考慮し、英語使用場面で「何ができるか」を測る要素を増しています。リスニングと同じ配点の筆記〔リーディング〕では、発音・アクセント、語句整序がなくなり、ディベート、プレゼンなどの場面が取り入れられ、事実と意見を区別するなどの汎用的スキルを試すようになっていきます。

これからは、4技能志向の学習指導要領と入試の乖離が少なくなります。本校では、「多量で豊かなインプット」と「適切なアウトプット」を方針に、Can-do を作成し、バックワードで計画をして、教科書での4技能型の授業を行っています。音読を大切に、「要約」や「意見表明」活動を行います。さらに、題材を、ジグソー法、紙芝居プレゼン、ディベートに発展させ、年2回程度の自作のスピーキングテストを実施します。英

語以外の言語にも応用でき、生涯の宝物になるような学習を勧めたいものです。

(みぞはた やすゆき・常翔学園中学校・高等学校教諭)

「気付き」と「継続」を促す音読の指導

小林大介



大学入学共通テストで筆記とリスニングの割合が均等になり、また試行調査に1回読みの設問が含まれたことは、リスニング指導がこれまで以上に重要になったことを意味しています。リスニング指導と一口に言ってもねらいや方法は多種多様ですが、その中でも高校の初期段階で指導したいのが、英語そのものを聴き取る力（以下、「聴き取る力」）です。

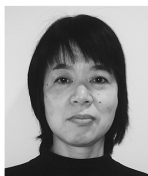
「聴き取る力」を育むには音読は欠かせません。その有用性は、多くの先生方が授業に導入されていることから明らかです。ただし、「聴き取る力」を高めるためには授業内の音読だけでは十分とは言えません。そこで授業外の音読に結びつく指導が必要になります。しかし「ひたすら音読してみよう」という“根性論”は昨今の高校生には響きにくいように思います。そこで私が取り組んでいるのが英語の音声への「気付き」と「継続」を促す指導です。

まず、授業の一部を利用して、英語音声学を高校生向けに噛み砕いた教材を用いて日本語と英語の音声の違いに気付かせます。扱う項目は、ストレス、リズム、抑揚、音変化、母音などです。そして「継続」を促すために、定期的に生徒に自身の音読を各自のスマートフォンに録音させる、教師自身のボロボロに使い込んだ音読教材を見せる

などの仕掛けを施します。英語の音の特徴に気付かせ、音読を継続したことで生徒が成長を実感できるところまでを目標に指導をしています。

(こばやし だいすけ・静岡市立高等学校教諭)

教科の壁を越えて



加藤仁恵

大学入試センターによる「新テスト」に関する資料を読み返してみた。実施の背景として「社会とのつながりを意識しながら学習の質を高め、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指すことがより一層重要になる」「知識・技能と思考力・判断力・表現力をその双方ともに、バランスよく、確実にばぐくむことが必要」とある。

授業をする上で日頃私が大切にしているのは、英語以外の教科に関わる部分を「英語を通じて」意識させることである。それはおそらく、入試が変わっても変わらないと確信している。ただ単に、それをより強く訴えていこうというだけである。「知識・技能」は従来の英語の授業形態を生かして「英語そのもの（語彙・文法・表現など）」を指導する。その上で「思考力・判断力・表現力」は他教科にも関わること、さらに「社会とのつながり」ということから日常生活の中で起きている出来事、自分を取り巻く環境などを意識的に観察し、それをトピックとして英語の中に取り込んでいく。このことは何も目新しいことではない。戦争に関するトピックが教材として取り上げられていればその背景について世界史の分野をひきこんでみる。動物の生態に関することであれば生物の授業や素材と結び付けてみる。こうした取り組みは今に始まったものではないだろうが、それをより「強く」意識して指導していこう、ということである。教科の壁を越えて、また時には「教科」という意識を超えることが新テストへの「対策」に自動的になるのかもしれない。

(かとう ひとえ・渋谷教育学園幕張中学校・高等学校教諭)

日々の授業と新テストの関連を整理



青山良輔

私の勤務する高校は、国際科の専門高校であり、生徒の外国語コミュニケーション志向や、海外での生活、異文化に対する志向が強いことが特徴です。授業内でも、ディスカッションやディベートなど、実際に英語を使う活動が好まれており、高校3年生の英語力はCEFR-JでB1.1からB2.2に大部分の分布をみると感じます。現行の入試制度においても、いわゆる「受験英語」にフォーカスした授業実践は生徒から敬遠されている節があり、教員側はそれへの対応を迫られることは稀です。よって、本校において、入試内容から逆算をして授業内容を考えることは不要です。

しかし、授業での学習内容や言語活動が、入試で問われている技能とどのように結びついているかを整理することは必須と感じます。例えば、本校では、1) プレゼンテーションを聞き、ノートテイキングを行い情報を整理する、2) ディスカッションにおいて、事実(統計や事例)をサポートとして自らの意見を述べる、という活動を行っています。2018年度試行調査を分析すると、1)の活動はリスニング第5問や第6問、2)はリーディング第2問Bで問われている技能に関わりがあることがわかりました。このように関連を整理することで、自信を持って日々の授業に臨めるのではないのでしょうか。試行調査では、発音・アクセントや語法・文法を問う選択問題が姿を消し、学習指導要領との関連がより強く反映されていました。これをいわゆる「受験英語」からの脱却と捉えれば、現場が「コミュニケーション型授業実践」と「現実問題としての入試対応」の板挟みから抜け出すチャンスであるといえそうです。

(あおやま りょうすけ・神奈川県立横浜国際高等学校教諭)